

報告2 フィンランド ヘルシンキ市・知的障害者居住施設 ソフィアンレヘト



人口56万人のヘルシンキ市に2000人の知的障害者がくらし、さまざまな手厚いケアを受けています。居住施設では350名が生活しています。元孤児院だったこの施設には70名が住んでいました。

ヘルシンキ市が運営している生活居住施設ソフィアンレヘトを訪問した。

- ・ヘルシンキ市には約 2000 人の知的障害者がいる。
- ・知的障害者のための生活施設で 350 人が生活していて、ここには 70 人が住んでいる。
- ・6 歳～ 16 歳は学校に通っている。どんな障害があっても教育を受ける権利がある
- ・この 3 階に 11 人が学ぶ学校がある。市内 8 か所には知的障害者のための学校がある。
- ・保育園ではインテグレートされている。

と、この道 30 年というスペシャルプランナーのウッラさんが話してくれた。

「こうした大きな施設に住むのは時代遅れです。いま、この施設も 14 のもっと小さいユニットに変えるようにとりくんでいます」

＊

「隔離・収容・絶滅」の場だった巨大施設は批判され、「ノーマライゼーション（ノーマライゼーション）」が提唱された。わが子に対する非人間的な処遇を改めることの強い要望からだったと、デンマーク親の会の会長さんから聞いたことがある。

フィンランドで見た生活施設では、なによりもそこで暮らしている障害のある人一人一人の人権を守りながら、より小さなユニット（10 人以下）、それ



を「家」とよべるフツウの人たちが暮らしているのと同じ単位まで改善することに努力していた。

もちろん、より小さな単位に、まさに「家」になっても、手厚い公的支援はゆるがない。すべて生まれた自治体が責任を持っている。そして、フツウの人と同じ程度の所得が保障されている。

＊

「北欧は、あまりに今の日本とかけ離れている。比較の対象にならないよ」そんな声も聞こえる昨今だ。北欧を初めて訪ねた 15 年前は、「日本とは 30 年くらいの差かもしれない」と感じ、勇み。2 度目の訪問では、「これは三世代経ないと民主主義は定着しないのかもしれない」と、ため息をつき、4 度目の 2004 年のときは、「マラソンのトップランナーの背中が見えない」と正直感じた。

今回強く思ったのは、権利を権利として徹底的に守り抜く。それは自分たちの権利を守ることなのだ、そういうシンプルな思想を持っているかどうか。それをなそうとする思想であり、政治であり、財政であるのだと感じている。

（蘭部英夫）